

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 5 月 11 日現在

機関番号：84433

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02340

研究課題名(和文)『鑿廻花』編纂史料の整理と翻刻 - 幕末明治期の彫金工に関する基礎情報の集約のために

研究課題名(英文)Arrangement and reprinting of historical materials compiled in 'Tagane-no-hana':  
For consolidation of basic information on metalsmiths in late Edo and Meiji period.

研究代表者

内藤 直子 (NAITO, Naoko)

地方独立行政法人大阪市博物館機構(大阪市立美術館、大阪市立自然史博物館、大阪市立東洋陶磁美術館、大阪  
・大阪歴史博物館・係長

研究者番号：70270725

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文):近年発見された、刀装具収集家・光村利藻の『鑿廻花』編纂等に関する文書について、その整理と情報の抽出を目的とした研究であり、初年度には文書のすべてをスキャナーにより読み取り、画像データ化した。2,3年目には学生の補助を得てその一部の解読を試みた。またこれらの作業と並行し、光村に続く時代の収集家・桑原羊次郎と勝矢俊一のコレクションとの比較検討も行った。これらの調査作業の結果、同史料群には『鑿廻花』編纂に関する草稿以外に、明治期に聞き取りされた金工の来歴に関する草稿や『近世金工略伝』の草稿を確認でき、これまで不明だった金工の事績を知る手がかりを得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今回画像データ化した史料群は、明治期に行われた装剣金工の調査活動の成果の一部であり、これらを史料として活用しうる状態にしたことにより、今後の活用が行いやすくなった。とりわけ、一部の著名工の事績を除き、ほとんどが不明かつあいまいであった幕末明治期の装剣金工研究の事績を追うための礎となることが期待できるものである。本研究で得られたデータは今後の研究において参照し、広く活用されるよう論考等での紹介を重ねていきたい。

研究成果の概要(英文):This is a study purposed at organizing and extracting information on the recently discovered documents related to the compilation of "Tagane-no-Hana" by MITSUMURA Toshimo, a sword fitting collector. In the first year, all documents were captured by a scanner and converted into image data. In the second and third years, with the help of students, I have attempted to decipher some of them. In parallel with these works, a comparison was also made between the collections of K UWABARA Yojiro and KATSUYA Shunichi, collectors of the era following MITSUMURA. As a result of these researches, the draft about the details of metalsmiths recorded in Meiji period and the draft of the "Kinse-Kinko-Ryakuden" (early modern metalsmith biography) were confirmed in the historical materials group besides the draft about the compilation of Tagane-no-Hana; therefore, I was able to catch a clue to the achievements of metalsmiths who were unknown until now.

研究分野：刀装具研究

キーワード：刀装具 金工

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 平成 18 年～20 年にかけて実施した若手研究(A)「光村利藻の刀装具蒐集に関する基礎的研究 そのパトローネージの解明のために」により、明治 30 年代に豪華本『鑿迺花』編纂のために侯野景孝らが実施した、装剣金工の悉皆調査記録の存在を明らかにした。ただし、当該時点ではこの記録は所在不明であり、全容は不明なままであった。

(2) 平成 28 年、平等院住職の神居文彰氏と京都国立博物館の末兼俊彦氏との協力のもと、当該資料が発見され、京都国立博物館に所蔵される運びとなった。京都国立博物館の理解を得て、申請者はその後の調査についての快諾を得た。

## 2. 研究の目的

(1) 1 の(2)に記した新発見を受け、史料情報を整理し、これに考察を加えることによって、8 年前に実施した研究をさらに発展させることを目指して行う。

(2) 幕末明治期の金工は、近年その細密性や技術力が再評価されているが、人物の事績に関する情報が乏しい。また、これを専門とする研究者不足もあって、誤認情報が引き写されて独り歩きしている事例もある。その点において今回の新出史料は、幕末明治期の情報をほぼ同時代に記録した貴重なものであり、伝来の過程でとこところ抜けがあるものの、記録自体の信ぴょう性は高い。これらの記録の整理と考察を行うことで、刀装具研究のみならず、幕末明治期の金工研究にとって基礎的な情報を得、その成果を公開することを目的とした。

## 3. 研究の方法

(1) 京都国立博物館所蔵『鑿迺花』編纂史料群の撮影を行う。当初は都度都度に出向いて写真撮影を行っていたが、あまりにも時間的に非効率であるため、京都国立博物館のご厚意により史料を一括で拝借し、数か月かけて大阪歴史博物館設置のスキャナーにて画像を取得した。

(2) このうち一部の資料については、古文書解読に精通した補助スタッフにより、解読を実施した。筆圧の低いメモ書き等の読みはかなり難渋を極めたが、そういったメモにこそ重要な情報が含まれている可能性があると考え、特に読みにくいものを抽出して実施した。

(3)(1)(2)と並行し、近代の著名な刀装具蒐集家・研究家との比較検討を行うため、桑原羊次郎や和田維四郎、勝矢俊一といった人物たちの事績や出版物、コレクションなどについても情報収集を重ねた。

## 4. 研究成果

(1) 京都国立博物館が所蔵する『鑿迺花』関連史料のすべてについて画像データ化を行った。得られた画像のうち、崩し字で書かれたものを中心に、学生の補助スタッフに解読を依頼した。例えばこの中に含まれる「香川勝広小伝」と題する記述を、『近世金工略伝(鑿迺花第五編附録)』(大正 8 年)に含まれる「香川勝広小伝」と照合すると、成果物に採用された事項と採用されなかった事項があるものの、その祖案となったのが当該史料であることは表現の類似性から明らかである。なお、伏せられた事項の中には、例えば作品制作にあたりそれが精工社から委嘱を受けてのことであったということを示す記述などがあり、これらが意図的に回避されたのか、単なる字数調整程度の理由によるものか、今後、他の事例と併せ、総合的に検討を深めたい。

(2) 光村利藻が開催した刀剣鑑賞会に関する資料と会場図面の一部を、自らが担当する特別展「鑿の華 光村コレクションの刀装具」において、解説文とともに一般公開した。その後、明治 35 年 5 月 18 日に行われた刀剣鑑賞会の出品リストの冊子『刀剣鑑定会 陳列品目録』が、東京国立博物館に所蔵されていることが分かり、全ページを記録撮影した。同冊子は一橋徳川家の徳川宗敬氏の寄贈品であり、徳川氏のメモと思われる肉筆も残されている。また同冊子は開催年次と出品資料名とが対応確認できるため、『鑿迺花』関連史料では年代が絞り込めなかった史料について、その特定のための根拠となりうるものであるとわかった。

(3) 根津美術館が所蔵する光村コレクションには銀製の刀剣が顕著に含まれることに着目し、同館ならびに清水三年坂美術館において銀刀の調査を行った。銀刀自体は確認できるだけで 10 点程度しか存在せず、制作された時期も短い。関係者も限られており、その主たるキーパーソンは光村利藻と池田隆雄であったのではないかと考察した。そして、多くは作者の同一性や意匠の同一性を追求する過程で贅沢なツナギとして、作品を豪華にするために制作されたものではないかと考え、論考にまとめた。

(4) 光村利藻は明治時代を代表する刀装具コレクターであるが、大正から昭和にかけての時代の代表的な刀装具コレクターに、島根県松江市の桑原羊次郎と、京都の勝矢俊一とがある。平成

30年度には、島根県立美術館において桑原羊次郎の生誕150年記念展が開催される機会があり、その際に同地に出向き、展示会場で公開された資料に加え、島根大学図書館に収蔵されている桑原家旧蔵の資料・図書類である桑原文庫の一部を熟覧した。また同年には勝矢俊一旧蔵の刀装具のうちの一部を所属先が受贈する運びとなり、平成31年度（令和元年度）には自らが担当する特別展として「勝矢コレクション刀装具受贈記念 決定版・刀装具鑑賞入門」を開催した。同展の準備過程において、勝矢俊一のコレクションの中に、桑原羊次郎旧蔵品も、光村利藻旧蔵品も双方含まれていることを確認した。これらはコレクター間における作品の伝来過程を考えるうえで参考になる事例である。

（5）前項（4）で触れた勝矢俊一旧蔵品の展覧会を開催するにあたり、大阪城天守閣に寄贈されている同氏の蔵書調査を行った。数千冊に及ぶため調査は難航したが、中には前項（1）で触れた『近世金工略伝（鑿廻花第五編附録）』のように、現在国立国会図書館でマイクロフィルム閲覧しか許されていない唯一本や、前項（4）の桑原家にはゲラしか残されていない、桑原羊次郎の『鑽工銘彫華押鑑索引』の完成本など、他所にほとんど見られない明治～昭和戦前期の貴重な書籍類が含まれていることを確認した。当該蔵書類は刀装具研究に資するところが大きいと思われるため、今後も継続的に調査を行っていく必要があると考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 内藤直子	4. 巻 第十号
2. 論文標題 銀刀をめぐる考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 根津美術館紀要 此君	6. 最初と最後の頁 29～47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 内藤直子	4. 巻 1
2. 論文標題 「刀装具へのまなざし 光村利藻、その情熱と冷静」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 展覧会図録『塹の華 光村コレクションの刀装具』	6. 最初と最後の頁 13-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 内藤直子	4. 巻 2
2. 論文標題 「装剣金工・大月光興をめぐる人々 絵師・岸駒との交流を中心に」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『画下遊楽 奥平俊六先生退職記念論文集』	6. 最初と最後の頁 477-491
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 内藤直子	4. 巻 1
2. 論文標題 「勝矢俊一氏と刀装具」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 展覧会図録『勝矢コレクション刀装具受贈記念 決定版刀装具鑑賞入門』	6. 最初と最後の頁 2 - 5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 内藤 直子、吉原 弘道	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東京美術	5. 総ページ数 80
3. 書名 もっと知りたい刀剣	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----